

我が国の若者の過去，現在，未来

渡辺公綱*

野口英世博士の評伝である「遠き落日」（渡辺淳一著）を読んだ。今では千円札の肖像画として収まっているが、私行でも研究においても、博士ほど毀誉褒貶相半ばする人物は稀であろう。著者はその人間性に一種の愛着を持ちながらも、客観的に彼の人生における振る舞いを余すところなく活写している。特に、野口博士が殆ど無一物で、日本で数回しか会っていない米国ペンシルバニア大学の、以後生涯の指導者となるフレクスマー教授を頼って渡米し、強引に研究助手として研究室に入り込む際に発揮される、強烈な粘り強さ、情熱と信念や、その後殆ど不眠不休で動物実験に精力を傾け、当時としては殆ど分かっていなかった蛇毒の作用実態を解明する際の、狂気と紙一重の強固な精神力などは、驚嘆に値する。これは一例に過ぎないが、このような気骨と情熱にあふれた人物は、明治という近代化の真っただ中であって誰もが「坂の上の雲」を目指していた時代だからこそ、かなりの確率で存在したのであろう。

それに比べ、現在の若者の実態はどうか。一昔前、日本人は一億総中流意識を持っていると言われ、実際4年前まではGDP世界第2位という繁栄を築いてきた。その繁栄の中で育てられた今の10代後半から20代半ばまでの若者はいわゆる「ゆとり教育世代」である。現状を肯定する意識が強いせいか、自分の能力を目一杯に発揮することはせず、6、7割にセーブする、頑張らない、という風潮が蔓延している。数年前、ある大学で講義していた時、英単語のアルファベットを筆記体で書いたら、我々は「ゆとり教育」で育ったから、活字体しか読めないとか抗議されて驚いた経験がある。しかもそれを何ら恥ずべきことと思わず、ごく自然にその状況を受け入れていることに強い衝撃を受けた。その延長線上にあるのだろうか、あるいはIT時代の弊害かもしれないが、大学生の間でレポートを作成するのに他人の文章を平気でコピー（copy & paste）する風潮があるという。今巷間で話題となっている理研のSTAP細胞騒動の底流にも、結果が良ければそれに至る過程には余り重きを置かないという同様の感覚が存在するのであろう。「頑張らない」風潮の他の例は、海外へ留学する学生が日本では2005年をピークに減少していることであり、東南アジア諸国では年々増加している状況と好対照をなしている。OECDの報告書によれば、これは日本人学生の「内向き」傾向や外国に出るリスクへの恐れを反映しているという。一方では、高校は有名大学に進学するため、大学もひたすら有力企業や有利な職を獲得するためのみに存在するかのような状況は依然として持続しており、自己の適性や潜在能力を客観的に見極め、それらを伸ばす努力はなおざりにされている状況は変わっていない。

一方現在の若者の良さを垣間見た例は、2月のソチ・オリンピックで発揮された10代、20代の若者や最近のテニスの錦織選手の活躍であろう。彼らは大舞台に立っても、国民の加熱した期待にも過度に緊張しない、心のゆとりをもっている。これは確かに昭和の時代に見られた「メダルを取れなければ国民に顔向けできない」といった切迫感から無縁のところにある。このような「ゆとり」は「ゆとり教育世代」の弊害とは無関係に持続してほしい特質である。

では未来の若者に何を期待すべきか。我が国の総人口は2010年以降減少に転じ、2040年後半には一億人を割ると予測されているが、一方65歳以上の高齢者人口は増加の一途を辿り、社会全体の活力が低下していくという悲観的な観測がある。その状況の中で将来を担う若者の意識が現状のままの「内向き」であれば、事態はますます深刻化するだろう。何とかして明治の時代に見られたような気骨と情熱を若者にとりもどしてもらわなくてはならない。私の狭い経験から見ても、若い時に遊びや勝負事に熱中していた連中が、その後立派な研究者として活躍している例が少なからず見られる。結局誰もが潜在的に持っている集中力と情熱の矛先をどこに向けるかによるのだろうと思われる。その矛先にpositiveな目標を示すことは、我々大人の責務であろう。折しも2020年に東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定された。これは単にスポーツ人の大きな目標になるだけでなく、一般人にも一種の転機となり、特に高齢者にとっては生きる励みとしての価値を持つ。東日本大震災で打ちひしがれた日本人の心に灯された一つの光明ともいえるかもしれない。

このようなmotivationを他にも如何に若者に提供し、彼らの潜在能力を高め集中力と情熱を發揮させるきっかけを作れるかが、我々の課題であるとともに、若者自身にも大いに奮起していただきたいと願うのは私だけではあるまい。

*東京大学名誉教授